

〔昭和八年六月二十一日付 木村莊八宛、河野通勢書簡〕

(宛書)

杉並区和田町一の五一

木村莊八様

(差出)

小金井村二八〇〇

河野通勢

木村莊八兄

二十二日 午後六時

御忙しい事と思ふから、のんきな貴兄の御返信をまつ事とする。

③の「一体僕自身を苦しめる」と云ふ事の次に次の文句を入れる。

「僕は一体正直な男だ。いつも何かハッキリする事を望んで居る。然るに、僕がこれ迄に見た世間と云ふものは、どうも正義観には甚だとぼしい。僕は、その事を深くいきどほって居る。しかし、とにかく近頃では、僕も多少世間と云ふものを見て来て居るが、その考を貴兄に、あてはめたくはない。貴兄との追想には、とにかくかけがえのない、いいなつかしいものがあつた。それを僕は、清く保ち度い。」

——その意味の事が、僕を苦しめると云ふ意味だ。——

前略

貴書つつましく拝見した。早く御返事を差上ぐる筈だったが、雑用の為めにおくられて居た上に、二、三日前から長子急病の為め、だんだん遅れて申訳ない事をした。

時事の金輪齋なる文章は、何奴が書いたか僕は知らない。唯何奴にしても、書いた以上は、恐らく相当の責任位は持つて居るだらふと思ふ。貴兄が石井鶴三氏の批評に引用されるにしても、金輪齋で結構ではないかと思ふ。僕の名前など貴文に引用した所で、恐らく何の価値もないだらふ。僕は、それほど美術社会には、重要視されて居ない。

貴文を得て、僕に不可解な事が一つある。金輪齋なる文を僕だと推定して、貴兄は一書を僕に寄越した。中に何かと御不満の語気が見へるが、貴兄を、ほめた場合は、貴兄は如何されるか。少し前の事だった。僕はその時事に俳画のことを書いたことがある。それには僕は、君の現代物の禪画に就きほめて書いた——これは恐らく、貴兄の眼に触れなかつたと思ふが、それは実際上から、僕と云ふ男は、人の悪口ばかり云ふ男だと思はれては甚だ困る。と同時に、僕は人の提灯を持つ男でもない。故に、いい事を云はれた時は、黙って居られ、悪く感じられた時には、直ぐ何かと小言を云はれるのには困る。

貴書を得て、僕は、一通り君と僕との関係を顧みて見た。君の友情関係も、また沈黙の関係もすでに、永い間の事になる。その間に貴兄には貴兄としての僕に対する考えがあるだらふし、僕は僕として、貴兄、に対し、一つの考えを持つて居る。

そして現今の間柄は、まことに変なものだ。変なものだと云ふ事は、友情として、押しているのか、引いているのか、そらしているのか分からない事だ。所謂友情として考へれば、僕は貴兄の態度に不可解なものを持って居る。これは、両方が割合に触れ合はない場合は、比較的無キズに、そのまま延長されるやうに思ふし、触れ合へば、時に合致するが、それよりも多く、食ひ違ふ方が、どうしても多いやうに思ふ。翻つて貴兄から僕を見れば、やはりそうだらふ。ところで、僕から云へば、そんな事を思ふ事は、**一体僕自身を苦しめる**(\*)。僕は、貴兄との間が是か非か、はつきり決まる事を今、甚だ欲して居る。僕は今、昔の君と僕との間の最もよかつた状態にかへるのを甚だ欲して居る。しかし、それには、君は僕に、僕は貴兄に、聞いてみたい事があるだらふ。貴兄にもし無ければ、僕にはある。僕はそれに依つて、貴兄と、僕との間に有る、すべての物を取り去り度い。

少し物々しい言い方でをかしいが、一言で言へば、一度貴兄と、話し合つて見たい。そして、合うものなら、合はせたい。——これが、今日、僕が改めて貴兄へ手紙を出す所以だ。——その話し合ふ場合は、貴兄は、僕にどんな事を聞いても、何物をも隠さないだらふ。——と同時に、僕は貴兄に遠慮なく、物を聞き度い。そして、この機会に、貴兄と僕との間を精算して置き度い。

以上の点で大体貴兄の御同意を得れば、近いうちに何処かで、御会ひしてもいい。

\*大字筆記